今時の一部大学生の友人関係の事象に、唖然

９／１７付けの「天声人語」の「友人とはなんぞや」を趣旨とした論説記事の中で、次のような今の一部大学生の友人関係の事象（抜粋）を知り、唖然とした。

【……。ある大学で、入学後１週間もしないうちに「友達ができない」と学生が相談にきたそうだ。「努力したがうまくいかない」と言う。……。せっかく入った大学を、友達ができないからと中退する学生が増えているという。このため、いくつかの大学が「友達づくり」の手助けを始めたそうだ。

学生たちは、友達がいない寂しさより、いない恥ずかしさに耐えられないのだという。「暗いやつ」と見られたくない。周囲の目が気になって学食で一人で食べられない。あげくにトイレで食べる者もいるというから驚かされる。……。携帯電話に何百人も「友達」を登録して、精神安定剤にする学生もいると聞く。……。】

友人とは、常に側にいてくれる人とは限らず、距離を置いていても、時に辛辣なアドバイスで自らの検証にヒントを与えてくれる人こそ真の友人と云えるだけに、大学で身近な友が側に居なくても何ら恥ずべきことでないと思う。

さて、なぜ、学生が直ぐに友人がでにないからと、孤独には耐えにくいのだろうか。

その背景には、科学技術が発展し、日常生活でもボタン一つで結果を得られる中で育って来た行動（思考）パターン（ex. ボタン押すだけで炊飯、洗濯。店員と会話なく購入できるコンビニ。等々）であるがために、時間がかかり自らの工夫も求められ、相手と交渉が必要となる面倒でしんどさも伴う人間関係さえ、直ぐに結果の見える行動パターンで対処しようとしているのでないかと、つい憶測してしまう。

コミュニケーションは相互交渉とも云える。

つまり、お互いの言い分を背景とした交渉があってこそ、共通する方向に共に踏み出せるというものでありる。

交渉では自分の言い分が全て通るとは限らず、時に心に傷つくこともあるのが当然で、自分の言い分（心地良さ）だけを直ぐに受け入れてくれる友人関係を求めるのは、精神安定剤に依存することと変わりないと思う。

また、大学は自らの意志、意見を人に説得できるだけの論理的表現力を身に付けるところでもある。

人と異なるところがあることに気づくことからこそ個性が育つだけに、一時的孤独に耐える力も養わなくっちゃぁ。

阿部幸泰　　（2010 年 9 月 18 日　記）